

令和4(2022)年度 佐野高等学校・附属中学校 学校自己評価表(1/6)

(学校経営)

学校運営方針	本年度の努力目標
<p>高い品性、健やかな心身、豊かな教養と人間性、行動力を備えた、グローバル社会において、リーダーとしてたくましく生き抜くことができる志の高い人材を育成する。</p> <p>○品位と誇りをもった心身ともに「たくましい」生徒を育成する。</p> <p>○中高一貫教育校の強みを活かし、魅力ある学校作りに邁進し、唯一無二の存在感のある県南地区の中核的な進学校にする。</p> <p>○生徒一人一人の自ら意欲的に学ぼうとする意欲を高めつつ、論理的・批判的に思考する能力を育むことができるよう、日々の授業の改善に組織的に取り組む。</p> <p>○望ましい集団づくりに努め、集団の良さを生かしながら、活力あふれる教育活動を実践し、生徒が協働して課題を解決できる力の育成に努める。</p> <p>○地域等と幅広く連携を図りながら、「Sanoグローバル構想」を全校体制で推進し、生徒、保護者、教員、地域等にとって、「幸せな学校」づくりを推進する。</p>	<p>① 「Sanoグローバル構想」の組織的・計画的な実践をする。</p> <p>② 生徒の学力向上に繋がる授業改善をする。</p> <p>③ 学校不適応などの生徒等への組織的な対応をする。</p> <p>④ キャリア教育の充実をする。</p> <p>⑤ 広報活動の持続的な取組を目指す。</p> <p>⑥ 教職員の働き方改革に努める。</p>

(各都・各学年) (評価点) 4=よくできた 3=おおむねできた 2=あまりできなかった 1=できなかった (総合評価) A=4~3.5 B=3.4~2.5 C=2.4~1.5 D=1.4以下

	本年度の努力目標	重点項目	具体的方策	評価点	総合評価	成果と課題
教務部	① 学校行事の円滑な運営	① P D C A サイクルの定着	① 反省・改善意見等をまとめて次年度の参考にする。	4	B	行事の後に必ず反省・改善意見を実施し、職員会議等で結果を職員間で共有する。
	② 統合型校務支援システムの効果的な運用	② 各種帳票の出力を行い、校務負担の軽減化を図る	② マニュアル等を作成し、職員が活用しやすい環境をつくる。	3		引き続き活用しながら、マニュアルとのすり合わせを行う。打ち合わせや会議のスリム化を図るために搭載機能を積極的に活用する。
	③ 校内施設設備の整備・活用	③ 教職員と生徒が過ごしやすい環境づくりに努める	③ 職員室内の設備の充実や校内の施設の有効活用。	3		各職員が設備・備品等の整理を心掛ける。旧パソコン室及び女子更衣室の活用法の検討。
	④ ホームページ内容の充実	④ 部活動の迅速なホームページ上への掲載	④ 部活動の記事内容を充実させる。	3		HP掲載方法マニュアルの周知、多忙な中でもHP更新するように心掛ける。
	⑤ 消耗品の省資源化及び節約を図る	⑤ 紙の節約と文房具類のリユースに取り組む	⑤ 職員会議資料等のPDF化を図る	4		引き続きPDF化を推進していく。
進路指導部	① キャリア教育の充実	① オープンキャンパス参加の指導	① 将来の職業を見据えた選択をさせる。	3	B	大学への直接参加は限られてしまったが、リモートによる参加が増加している。
		② 大学入試説明会	② 大学担当者による説明を本校で行う。	3		通常通り実施することができた。大学によってはリモート参加もあった。
		③ 総合、HRの時間等を使った進路指導の充実	③ 進路指導用資料を新たに開拓する。	3		新たな企画等を立案し、工夫を凝らして充実できた。
		④ 予備校講師による保護者会時の講演会実施	④ 計画的指導により意識の向上を目指す。	3		駿台・河合塾・東進とも実施できたが、更に充実したものになりたい。
		⑤ 卒業生による受験報告会の実施(高1・2)	⑤ 卒業生による現役生支援を行う。	3		3月15日に実施した。
		⑥ 中学生の進路研究と意識の向上(企業探求学習)	⑥ 部内での役割を分担し、円滑な実施を目指す。	3		充実した時間を過ごすことができた。
		⑦ 中高6年間を見通したキャリア教育の充実	⑦ 中高が連携し、職業意識から進路意識の向上につなげる。	3		昨年度より充実したものとなった。中高で系統的に実施できるものを見極め、更に充実させていく。夏季休業中には卒業生を呼んで在校生からの質問に答えることができた。
	② 進路情報の適切な伝達	⑧ 進路情報の提供、進路閲覧室の整備	⑧ 生徒が利用しやすいよう、資料整理を心がける。	3		進路指導部でサポートしているが更に充実させたい。閲覧室は高3生の放課後の利用が活発である。
		⑩ 旭城祭で進路相談会の実施	⑩ 本校への進学を目指させる。	3		保護者も来ていただき活発に運営できた。
		③ 進路実現のための支援体制の整備	⑪ 総合・学校推薦型選抜への早期対応	⑪ 進路指導部が高3学年と綿密に連絡を取り合う。		3
	⑨ 志望校検討会・入試結果検討会の実施		⑨ 昨年度の反省を行い、現高3の指導につなげる。	4		「事前検討」時に高1・2正担任も参加することができ、有意義な検討をすることができた。
	⑫ 共通テスト・個別試験結果の分析と指導法の改善		⑫ 生徒の得点状況から来年度に向けて指導法を改善する。	3		共通テストのみでなく、東京大学等の難関大の指導の充実に向けて動き出した。
	④ 保護者に対する進路情報の伝達	⑬ P T A 総会・支部会での進路情報提供	⑬ 昨年度の詳細な合格状況について報告する。	3		コロナの影響があったが、PTA総会、同窓会会報、ホームページ等で伝達はできている。

令和4(2022)年度 佐野高等学校・附属中学校 学校自己評価表(2/6)

(各部・各学年) (評価点) 4=よくできた 3=おおむねできた 2=あまりできなかった 1=できなかった (総合評価) A=4~3.5 B=3.4~2.5 C=2.4~1.5 D=1.4以下

	本年度の努力目標	重点項目	具体的方策		評価点	総合評価	成果と課題
学習指導部	① 探究活動から本質的な学びや進路活動につなげる	① sanoG. 活動の体系化	①	総学のみで実施する授業内容の確立。授業担当の持ち回り。(高1・2)	3	B	研究方法をステップごとに授業担当者が講座を持つことができた。ただし、実際の研究に当たってはアンケートの仕方や文献の表記など不十分な部分もあった。年1コマでの取り組み方法を見直す必要がある。 できなかった。 土曜講座も含めれば多く呼ぶことはできた。地域の方はコロナで呼べなかった。 校長だよりに頼ってしまった。 貿易ゲーム・避難所ゲーム、wataraidの講演会など多岐にわたるプログラムが組めた。課題研究にあてた時間は教員がいまいどうまく使えなかったところもある。 同上。 参加人数は増えなかったか、次年度にむけて方策をを考えたい。LHRで実施できたのは良かった 総合的な学習の時間にて実施 新しい学力と授業力向上についての研修が良かった。次年度以降も続けると良い。 桐生高校・山形東高校の視察を実施 具体的なアクションがあまり起こせなかった。さらなる研究が必要。 先生方へのアンケートは実施した。検討は不十分。 オンライン授業など支援員による補助が助かった。 あらゆるところで使用がなされた。 今年度は実施しなかった。 ブックトークを実施しリーフレットを図書室に置いた。ビブリオバトル2年目、次年度以降も継続したい。 高校生は使用する生徒に限られ利用者は減少している。 教員研修や小論文指導など。 できなかった。 校務システム導入で使用しなくなった。 各教科で取り組んだが、教科によって取り組みに差がある。 すべてとはいかないが、多くの教科でICTの使用が日常的に行われた。
			②	全国大会への応募	2		
			③	外部との連携。外部講師による講演を多く実施する。講演会に地域の方を招く。	3		
			④	広報活動の強化。各種報道機関との連携。	3		
			⑤	土曜講座の活用。	3		
			⑥	STEAM教育を意識した内容の展開。	3		
			⑦	阿見先生との連携(哲学カフェ)	3		
			⑧	シンカ宣言と志望理由書のリンク。(高3)	3		
			⑨	教員研修の実施。	3		
			⑩	先進校視察。	4		
			⑪	生徒自身が学び方を見つめる機会・学ぶ機会を設ける。	2		
	② 主体的で深い学びの実現	② 本質的な学びとのつながり 進路活動とのつながり	⑫	例年の実施(習熟度授業の活用、不振者特別指導)に加え、上位者、下位者への効果的な対応の検討。	2		
			⑬	ICT支援員による授業見学と助言	3		
			⑭	使用頻度を上げる(校務等で使う場面を増やす)	3		
			⑮	必要に応じた講習会の実施	/		
			⑯	ブックトーク/ビブリオバトル	4		
			⑰	自習室としての利用	3		
			⑱	阿見先生との連携	3		
			⑲	評価と指導の一体化の観点から、最適な方法を探る。教科会の実施。教科間の情報交換。	2		
			⑳	Excelの表を使用してみて修正を加える	/		
			㉑	PDCAサイクルでの家庭学習方法の指導。	3		
			㉒	すべての教科で一人一台パソコンやプロジェクター等を効果的に使った授業実践を行う。	4		
③ ICTの授業への活用	③ 学習習慣の確立 ④ 授業改善(考える授業・楽しい授業) ⑤ 学習方法を学ばせる ⑥ 成績格差への対応	⑪	評価方法(主に主体性)の再検討				
		⑫	評価算出方法の見直し				
		⑬	家庭学習方法の指導				
		⑭	一人一台パソコンやプロジェクター等のICT機器を使った授業研究				
		④ 読書の推進	⑦ 授業への活用の提案 ⑧ 教員のスキルアップ ⑨ 読書の良さを認識する ⑩ 図書室の利用率向上	⑮	必要に応じた講習会の実施	/	
				⑯	ブックトーク/ビブリオバトル	4	
				⑰	自習室としての利用	3	
				⑱	阿見先生との連携	3	
				⑲	評価と指導の一体化の観点から、最適な方法を探る。教科会の実施。教科間の情報交換。	2	
				⑳	Excelの表を使用してみて修正を加える	/	
㉑	PDCAサイクルでの家庭学習方法の指導。			3			
㉒	すべての教科で一人一台パソコンやプロジェクター等を効果的に使った授業実践を行う。			4			
⑤ 新学習指導要領に対応した評価基準の見直し(高)	⑪ 評価方法(主に主体性)の再検討 ⑫ 評価算出方法の見直し			⑮	必要に応じた講習会の実施	/	
		⑯	ブックトーク/ビブリオバトル	4			
⑥ 「自ら学ぶ学び方」を身に付けた生徒の育成(中)	⑬ 家庭学習方法の指導 ⑭ 一人一台パソコンやプロジェクター等のICT機器を使った授業研究	⑰	自習室としての利用	3			
		⑱	阿見先生との連携	3			
⑦ ICTの有効活用(中)	⑮ 必要に応じた講習会の実施 ⑯ ブックトーク/ビブリオバトル	⑲	評価と指導の一体化の観点から、最適な方法を探る。教科会の実施。教科間の情報交換。	2			
		⑳	Excelの表を使用してみて修正を加える	/			

令和4(2022)年度 佐野高等学校・附属中学校 学校自己評価表(3/6)

(各部・各学年) (評価点)4=よくできた 3=おおむねできた 2=あまりできなかった 1=できなかった (総合評価)A=4~3.5 B=3.4~2.5 C=2.4~1.5 D=1.4以下

本年度の努力目標		重点項目	具体的方策	評価点	総合評価	成果と課題
生徒指導部	① 自己指導能力の育成 ② 交通安全意識の高揚 ③ 「心の教育」の推進 ④ 教職員(生徒)の危機管理意識の高揚 ⑤ 開発的教育相談 ⑥ 予防的教育相談 ⑦ 治療的教育相談	① 基本的な生活習慣の確立及び規範意識の育成 ② 自立に向けた指導・援助 ③ 交通ルール遵守と交通マナーの向上 ④ 豊かな人間性の育成 ⑤ 防犯意識の向上 危機管理マニュアル共通理解の徹底 ⑥ 積極的な教育相談の実践 ⑦ 生徒の悩みや問題の早期発見・早期対応 ⑧ スクールカウンセラー(SC)及びスクールソーシャルワーカー(SSW)の効果的活用	① あいさつの励行。	4	B	職員、生徒ともにしっかりできた。
			② 時間厳守の意識向上。	3		1分前着席を呼びかけ、時間厳守の意識向上に努めた。
			③ 遅刻削減。	3		立ち番のおかげで、だいぶ減った。
			④ 自己の目標に向かい積極的に行動しようとする態度の育成。	3		高校で8:20に間に合わない生徒が数名いて、顔ぶれは変わらない。特別に指導する必要が あ 進路決定等、自分の判断で行動できるようになってもらいたい。
			⑤ 望ましい行動選択や場面に応じた行動選択及び意思決定。	3		意思決定やそれに伴う行動選択を教員の指示を待つのではなく、生徒自ら動くことが必要。
			⑥ 危険予測・危険回避意識の向上。	4		交通安全教室を実施したり、学校から駅周辺の校外補導を定期的に行ったりした。その際、 気づいたことなどを各クラスで呼びかけてもらい、生徒の危険予測・危機回避意識の向上に 努めた。 自転車のヘルメット着用については、努力義務になり交通係の呼びかけにより数十名の生徒 がヘルメットを着用するようになった。今後も継続指導をして着用人数の増加に努めたい。
			⑦ 他人を思いやれる心の育成。	3		・継続して「思いやりの心」もった生徒を育成していく必要がある。
			⑧ 生徒の心情や家庭環境に配慮した指導の充実。	4		中学校では、登下校に不安を感じる生徒・保護者の意見を受け、携帯電話・スマートフォン等 の校内持ち込みに関する調整を行った。教員がすべてを決めるのではなく、生徒会が主導とな り、教員、PTAと話し合いの場を設けながら運営方法について決めることができた。 欠席した生徒がいた場合、家庭への電話連絡を行い、生徒の状況把握、保護者の不安軽減 に努めた。
			⑨ 貴重品の管理の徹底。	3		移動教室の際の教室の施錠や貴重品袋を活用して、貴重品の管理を徹底することができた。
			⑩ 危機発生時の円滑な対応。	3		生徒の不安や悩みを解消するために「いじめ・教育相談に関するアンケート」を毎月実施し、 いじめの早期発見、未然防止に努めた。また、いじめを認知した際は、学年、生徒指導部が 連携し対応にあたることができた。さすまたの使い方を知りたい。
			⑪ 教職員が生徒の情報を確認・共有できる体制を整え、学年・学校職員が、様々な場面で一人ひとりの生徒に関わっていく。	4		情報の確認、共有はできたと思う。
			⑫ Q-U検査等を有効に活用し、生徒の抱えている問題の早期発見、早期対応に努める。	3		活用については担任任せになってしまった部分はあるが、早期発見、早期対応にはつながつ ている。
			⑬ 担任・教育相談部・SC、SSWの連携を強化し、学校としてサポートできることを検討、実践する。	3		中高一貫なのでSCの来校回数が多く、係としてはありがたい。
			⑭ スクールカウンセラーによる、職員への講話等を実践する。(事例検討を含む)	3		学年保護者会等で講話を実施し、有効活用できた。
特別活動部	① 中高合同行事の活動内容の連携と、指導内容の一貫性を図れるようにする ② 部活動の短時間で効率的な活動の充実に努め、参加の促進を図り、自主的かつ意欲的な活動を目指す ③ 他者と協働して学級・HR活動を行うことでより良い人間関係の構築と所属意識の高まりを目指す	① 中高の連携体制を強化し、行事(旭城祭など)を企画運営する ② 学校祭クラス企画の充実をはかる ③ 各種委員会の自主的な活動を促進する ④ 中高の連携体制を構築し、生涯を見据えた部活動の継続を推進する ⑤ 各部の活動時間の厳守 ⑥ 部活動の活動場所の調整と各部による自主的で衛生的な部室等管理を指導する ⑦ LHRや学活の時間での学級活動の充実をはかる	① 中高生徒会役員を中心に、意見交換をし、中高で一貫性のある活動ができる場面や時間を調整する。	3	B	中高生徒会内で検討し、活動の機会を揃えることなどの工夫ができた。運動会では高校生が中学生の部の運営補助を行ったり、旭城祭では各クラスで互いの企画において干渉しないような教室配置にしたりすることができた。
			② 高校各クラス企画の充実と、中学企画の精選。	4		昨年度より制限が少なくなったこともあり、多彩な企画が生徒主体で立案、運営することができていた。
			③ 生徒が企画を立案する環境の整備。中高連携の推進。	3		中学は活発に活動をしていたが、高校の活動が少なかったため、委員会の再編を考え、議論を重ねた。
			④ 部員を中心に据え、顧問と連携をとり活動内容等を作成・活動し、高校生が中学生を指導する場を設けることを目指す。	2		各部活動の活動実態を把握することが難しかったため、十分な取り組みに至らなかった。特に本校の特徴である中高での取り組みを中心に据え、来年度に生かしていきたい。
			⑤ 各HR・各部活動での指導の徹底。	3		中学は比較的守れている様子であったが、高校は厳守することが難しい場面が見られた。
			⑥ 共同利用施設を管理することの重要性を説明するとともに、定期的に点検を行う。	3		ある程度の周知はできたものの、使用法の徹底とまでには至らなかったため、来年度はしっかりと指導していきたい。
			⑦ HRでの役割を自覚させ、学級活動の中でそれに沿った職責を果たせるよう取り組ませる。	4		一人一人が与えられた職責を果たしたことによって、学級運営は順調に進んだ。

令和4(2022)年度 佐野高等学校・附属中学校 学校自己評価表(4/6)

(各部・各学年) (評価点) 4=よくできた 3=おおむねできた 2=あまりできなかった 1=できなかった (総合評価) A=4~3.5 B=3.4~2.5 C=2.4~1.5 D=1.4以下

本年度の努力目標		重点項目	具体的方策	評価点	総合評価	成果と課題		
健康指導部	① 学校管理下における事故、災害の防止に努める	① 学校行事における安全管理を徹底する	① ・事前健康診断、個別指導の徹底、事故防止に努める。 ・学校保健委員会を年2回開催する。	4	B	感染症法上の新型コロナウイルスの扱いが緩和される来年度は学校保健委員会の年2回開催を実現させたい。修学旅行は事前指導により食物アレルギー対応ができた。		
			② 防災意識を高める	② ・防火防災、土砂洪水災害避難訓練および防災講話の実施。		4	今年度から避難訓練を外履きで行ったことは、実践的でとてもよかった。地震、火災、竜巻、不審者対応などを想定した避難訓練も必要である。土砂洪水避難訓練のあり方を見直し、生徒向けに身近な話題で講話ができると良いと思う。	
			③ 関係機関との連携を密にする	③ ・学校医・中・高の共通理解を図り、連携を進める。 ・マラソン大会等、事前打ち合わせを密にする。		4	台風被害やコロナ禍により開催できなかった校内マラソン大会も3年ぶりに開催できた。学校医との個別相談、学校医、中高、ボラテアとの事前打ち合わせなど関係機関との連携も円滑に進めることができ、安全に開催できた。	
				④ ・救命救急隊員による心肺蘇生法講習会の実施。(中学生も参加)		4	全職員が参加できるように早い時期からの実施日の調整を行い全体に周知できるとよい。	
			② 自己の健康管理能力の育成する	④ 望ましい生活習慣の確立と健康の保持増進の意識を高める		⑤ ・保護者への啓発。(資料の提供)	4	定期的にほげんだよりを活用した保健指導を実施することができた。授業中のケガは応急手当、通院等について日本スポーツ振興センターの利用を進めることができた。
						⑥ ・保健学習。(健康に関する知識や技術の習得)	4	教室や個人のICT機器を積極的に活用して知識の習得に努めることができた。
						⑦ ・新型コロナウイルス感染拡大防止対策を徹底する。(手洗い、うがい、マスク、教室の換気、アルコール消毒)を徹底する。	4	新型コロナウイルス感染症とインフルエンザが流行する冬の時期、中学保健委員会では生徒の発案で感染対策と呼び掛けの放送を実施した。感染対策はマスク、換気、消毒が習慣となった。今後は継続すべき点を見直しを対策をしたい。
	③ 生命の尊重と性に関する諸問題の解決能力を育成する	⑤ 健康診断結果の適切な事後指導と自己の運動能力の把握と体力の向上をはかる	⑧ ・各種検診結果の適切な事後指導時の協力体制の整備と短縮を図る。	4		引き続き、歯の健康を指導していきたい。歯科検診への呼びかけは大変効果的だったと思う。学校医の検診未受診者が確実に検診を受けられるよう体制を整える必要がある。		
			⑥ 余暇時間を活用して体力の増進を図る	⑨ ・新体カテストの結果に基づき、自己の体力を高める。		3	継続的に活動する生徒たちは一部のものに限られていた。	
			⑦ 正しい性知識の習得をさせる	⑩ ・性教育講座を実施する。		4	今年度も講師を助産師に依頼して実施した。保護者の参加もみられ、生徒も熱心に聞き充実した講座となった。	
			④ 職員の健康の保持増進を促すとともに適切な健康管理につとめる	⑧ 健康管理医との連携を十分に行う(年12回定期巡視、全職員対象)		⑪ ・保健学習において性に関する視聴覚教材を積極的に利用する。	4	DVDなどを積極的に活用でき、授業内容が充実した。
	⑫ ・安全衛生委員会を定期的に開催する。 ・生活習慣予防の指導を充実させる・	4				安全衛生委員会を有意義なものとするため内容の工夫をしたい。学校医による校内巡視の実施。		
	⑬ ・新型コロナウイルス感染症をはじめとする感染症の予防対策を徹底する。	4				産業医との健康相談を実施できる職員が少ないため、次年度はその機会を計画していきたい。		
	⑤ 清掃時の服装の徹底(特に女子)	⑨ スカートではなく、体育着等ズボンでの清掃	⑭ ・担当顧問による声かけ、放送での呼びかけを行う。	4		清掃用具の変更、特に水拭きモップを導入は時代に合わせた良い変革だったと思うとともに併せて、スカートでも可にしてよいのではないかと。		
⑮ ・安易に簡易清掃とせず、具体的な内容を指示する。			4	安易な清掃カット、簡易清掃の日が減少し、清潔な環境を保つことができたのは良かった。				
⑯ ・月1回の安全点検の実施とその結果をまとめ、積極的に清掃用具の補充と問題箇所等の改善につとめる。 ・特にゴミステーション当番、モップ交換の充実。			4	安全点検の結果から事務室が迅速に対応してくれたので、多くの場所の修繕ができた。				
⑥ 日々の清掃活動を充実する	⑩ 清掃開始時刻と終了時刻を守る(放送を入れ、音楽を流す)	⑭ 担当顧問による声かけ、放送での呼びかけを行う。	4					
					⑦ 委員会活動の充実	⑪ 委員会を定期的に開催する。(中学生は、月1回清掃時間中に実施。)清掃時に音楽を流し活動の促進を図る	4	
渉外部	① 学校と家庭、地域との連携の強化	① 保護者と連携しながら、生徒の学校生活をよりよくできる本年度版PTA活動を模索する	① 保護者会等の学校を会場とした会合の際にクラス懇談を可能なかぎり実施する。	3				
		② PTA会報を活用し、学校行事や取り組みを保護者に発信する	② 中高一貫校のPTA組織としてのより良いあり方の支援していく。	4	各支部会を合同形式で実施するなど、各種PTA行事の開催内容の見直しはあった。今後も本校にとってのPTA活動のあり方を検討していきたい。			
		② 学校と地域、関係団体とのあり方	③ 同窓会、地域、諸団体との良好な関係を維持していく。	③ 役員の任期終了に伴う新体制づくりの準備を行う。	4	役員改選の年であったが、来年度以降も円滑に活動が進めることができるような新体制づくりを行うことができた。		
			④ 引き続きコロナ禍であるため、大変な面もあるが、出来ることを模索しながら、地域との連携をより充実させる。	④ 地域との連携をより充実させる。	3	コロナ禍で制限は一部残ったものの、その中でできる限りの充実をはかった。		

令和4(2022)年度 佐野高等学校・附属中学校 学校自己評価表(5/6)

(各部・各学年) (評価点) 4=よくできた 3=おおむねできた 2=あまりできなかった 1=できなかった (総合評価) A=4~3.5 B=3.4~2.5 C=2.4~1.5 D=1.4以下

	本年度の努力目標	重点項目	具体的方策	評価点	総合評価	成果と課題
中学1年	① 目標を持ち、意欲的に学ぶ生徒 ② 互いを尊重し協働してよりよい集団づくりに貢献できる生徒 ③ 決まりを守り、規則正しい生活を送れる生徒	① 家庭学習の習慣を確立させる。 ② 目的意識をもち、主体的に学ぼうとする態度を育てる。 ③ 一人一人の良さや違いを受け入れ、互いに温かい言葉掛けのできる雰囲気作りに努める。 ④ 集団の一員としての自覚と責任感を育てる。 ⑤ 道徳教育の充実と実践を図り、多面的・多角的なものの方や考え方を身に付けさせる。 ⑥ 基本的な生活習慣の確立 ⑦ 規範意識を高め、正しい判断の下、行動できるようにする。	① 家庭学習の習慣化・忘れ物ゼロの意識付けを図る。	3	B	授業中の取組や課題の提出など、多くの生徒が意欲的に学習することができている。しかし、個人差があるので意識付けを図りたい。 PDCAサイクルはかなり定着してきており、授業中の取組や課題の提出など、多くの生徒が意欲的に学習することができている。 各教科担任が教科の特性を踏まえつつ授業を展開している。グループワーク通して、協力し合い、学び合おうとする様子が見られた。 年度当初に比べ、学級や学年をより良くするために、率先して行動したり、指示を待つのではなく自ら考えて行動したりできる生徒が増えてきた。 学校生活の中で、自分の役割をきちんと果たすことができる生徒が多く、またそうした場面で必ず声を掛け、励ますよう努めた。 各担任が足並みをそろえ、情報交換しながら授業を実践することができた。 大部分の生徒が規則正しい生活習慣を身に付けている。 自発的に清掃活動に取り組む生徒が多い。基本的な生活習慣の定着を図るために、学年生徒指導を中心に継続的な指導を実施することができた。 生徒指導上大きな問題はほとんど見られず、落ち着いた生活ができた。不登校生徒の保護者とも連絡をとりつつ対応することができた。
			② PDCAサイクルを活用した学習による学力向上を図る。	3		
			③ 授業による挙手発言を奨励する。	3		
			④ 学級活動、行事などさまざまな場面で生徒の良さや頑張り認め、励ますよう努める。	3		
			⑤ 一人一役(清掃・週番活動等)	4		
			⑥ 年間39回道徳授業の実践と道徳係を中心とした授業実践に努める。	3		
			⑦ 時間厳守(5分前行動の習慣化)・問題の早期発見と早期指導の実践	3		
			⑧ 教室の環境整備(授業の開始・終了時に机の整頓を習慣づける。)	3		
			⑨ その場での指導を徹底するとともに、家庭との連絡を密にする。	3		
			中学2年	① 他と協働し、互いを尊重しながらよりよい集団を形成することができる生徒 ② 将来を見据え、ともに学び合うことができる生徒 ③ 自ら基本的な生活習慣の向上に努め、はじめのある学校生活を送る生徒		
② ソーシャルスキルトレーニングを取り入れ、場に応じた行動の実践力を育む。	3					
③ 道徳科の授業の実践を通して心の成長と個性の伸長を図る。	4					
④ 毎時間の授業の中で、基本的な生活習慣の育成を図りながら、学習習慣の定着を意識させる。	4					
⑤ 進路について考える機会を学級活動等の機会に設け、将来についてより深く考えさせる。	3					
⑥ あいさつ、返事、清掃等あたりまえのことができるようにする。	3					
⑦ 開発的な指導を心がけ、家庭との連絡を密にする。	4					
中学3年	① 将来を見据え、ともに学び合うことができる生徒 ② 他と協働し、互いを尊重しながらよりよい集団を形成することができる生徒 ③ きまりを守り、自己管理をきちんとできる生徒	① 中高6年間基盤となる居がいのある学年、学級を形成する。 ② 学習習慣の定着を図るとともに積極的な学びの土台を育成する。 ③ 自ら基本的な生活習慣の向上に努め、はじめのある学校生活を送る。 ④ 生徒を正しく理解し、予防的な生徒指導を心がける。 ⑤ 家庭との連携を密にし、共に生徒を育てていく。			① 総合的な学習の時間(課題研究や講話等)を通し、生徒同士のつながりや、さまざまな人々との関わりの機会を設けるように心がける。	3
			② 道徳科の授業の実践を通して心の成長と個性の伸長を図る。	3		
			③ 高校卒業後の進路について考える機会を学級活動等の機会に設け、進学への意識を高めながら入学できるように指導する。	2		
			④ 毎時間の授業の中で、基本的な生活習慣の育成を図りながら、学習習慣の定着を意識させる。	3		
			⑤ あいさつ、返事、清掃等あたりまえのことができるようにする。	3		
			⑥ 開発的な指導を心がけ、家庭との連絡を密にする。	3		

令和4(2022)年度 佐野高等学校・附属中学校 学校自己評価表(6/6)

(各部・各学年) (評価点) 4=よくできた 3=おおむねできた 2=あまりできなかった 1=できなかった (総合評価) A=4~3.5 B=3.4~2.5 C=2.4~1.5 D=1.4以下

	本年度の努力目標		重点項目		具体的方策		評価点	総合評価	成果と課題
高校1年	① 進路目標の明確化と学力の向上 ② 調和のとれた人格の形成 ③ 基本的な生活習慣・学習習慣の確立	① 現在の自分、将来の自分について考えさせる ② 基礎学力の向上を促す ③ 能動的な活動を促す ④ 学習意欲を高める生活習慣を確立させる ⑤ 自学自習の習慣を定着させる	①	LHRで進路学習を進めるとともに、生徒を観察し面談を積極的に実施する	3	B		LHRや卒業生との交流会等を通して、進路に関する意識づけができた。また面談を通して、文理選択についても考えさせることができた。各人が進路目標に向けていかに努力できるかが今後の課題である。	
			②	落ち着いた態度で集中して授業に取り組みさせる	4			1年間を通して、多くの生徒が落ち着いた態度で授業に取り組みした。自分に合った勉強方法を見つけられるよう、改善に取り組み姿が見られた。	
			③	教科外活動、部活動、学校行事等への積極的な参加を促す	3			部活動や学校行事では、互いに協力しながら活動に取り組んだ。ボランティア活動や学校外活動に参加する生徒もいたが、課題研究におけるFWへの参加がやや消極的だった。	
			④	高校生らしい服装や生活態度を心掛けさせる	3			素直な生徒が多く、何事もまじめに取り組むことができた。服装は若干崩れた面があり、学年、学校全体での情報共有が不足していたと感じられるため、今後の課題である。	
			⑤	各人で予定を立て効率的に学習に取り組ませる	3			定期試験前に学習時間調査を行い、試験範囲を各々で確認、メモさせることを通して、自覚をもって学習に取り組めるようにした。試験期間中の教室を自習室にすることで、学習環境を整えた。	
高校2年	① 意欲的、主体的に行動できる生徒の育成 ② キャリアの視点を持ち進路を考える。 ③ 学びの充実	① 学校生活に生き生きと全力で取り組む態度を身につけさせる ② 将来について深く考え、進路実現に向け、自ら切り開く力を育てる ③ 自学自習力を高め、生徒間の学び合いを促進する	①	探究活動、部活動、学校行事等への積極的な参加を促す。	4	B		探究活動では昨年度からテーマを継続して研究する班も多く、1年次より研究の質を高めることができた。また、課題研究を生かして校外のボランティアやコンテストに参加する生徒も多くおり、積極性が感じられた。	
			②	生徒との面談を定期的にかつ時期をとらえて実施する。	3			教育相談習慣や面談シートを活用し、定期的に生徒との面談を行うことができた。ただ、「進路実現に向け自ら切り開く力」にはまだまだ課題があるため、次年度以降も粘り強く指導していく必要がある。	
			③	自分の強みは何かを考え、キャリアの視点から深く考えさせる。	3			シンカ宣言(=志望理由書)の作成を通じて、大学卒業後に自分が実現したいことや自分の強みについて深く考えることができた。ただ、深く考えられていない生徒も多いため、継続的な指導が必要である。	
			④	学習スタイルの確立を支援するとともに、互いに学び合える環境を整える。	4			授業内のグループワークや放課後に自習している様子から、生徒同士で互いに教え合い学び合う雰囲気が醸成できていると考えられる。次年度は「受験は団体戦」であることをより意識させたい。	
高校3年	① 中高一貫校の最高学年としての節度ある態度を育て、大人になることへの自覚を高めさせる。 ② 自律した学習者となる。 ③ シンカ宣言をもとにキャリアデザインを描き、その実現を目指す	① 後輩の模範となるような日頃の生活態度に気を配らせる ② 学ぶ目的を意識し、自学自習に取り組ませる ④ 面接指導を充実させ個々の希望を十分に把握する	①	日々の授業、学校行事等すべてに意欲的に取り組ませる。	4	A		挨拶、登校時間や教室移動、服装等において概ね良好で安定した生活態度は下級生の模範たるものであった。運動会などの各種行事に前向きに取り組むとともに、新たなイベントを創出し学校を盛り上げようとする意気込みが生徒から感じられた。	
			②	PDCAサイクルを回す力を身につけさせる。生徒間で学び合う体制へのバックアップと環境づくりをする。	4			低学年時より手帳の活用等を通してのスケジュール管理を呼びかけた結果、3年次には各自の実状に応じた学習を計画的にすすめる生徒が大勢を占めるようになった。各教科の授業で学び合いを進める中で、進路内定者が未決定者と共に学習に励む姿が見られた。懸案であった進路内定者の向上心の低下、欠席率の増加に歯止めをかけることができた。	
			③	進路指導部との連携を密にし、進路情報の提供と場の提供を適切に行う。自らのキャリアデザインを意識させ、最終的に本人が進路選択できるよう支援する。	4			進路検討会の結果を踏まえ、進路面談を充実させたことにより、おおむね各生徒が納得した進路実現ができた。志望理由書の早期作成等の取り組みを通して総合型や学校推薦型選抜へのスムーズな動き出しができ、他との比較ではなく自己の適性に応じた進路開発をしようとする意識が浸透した。志望学部学科毎の場を設ける試みは生徒同士が情報交換をしていく土壌づくりにつながった。低学年時に実施した社会の一線で働く大人の講演、シンポジウム、SG教養講座等を通じて様々な大人と接することができた。	